東広島市教育委員会文化財調査報告書　第 62 集

吹越２号遺跡発掘調査報告書

－道の駅整備事業－

２０１９

東広島市教育委員会

吹越２号遺跡発掘調査報告書

－道の駅整備事業－

２０１９

東広島市教育委員会

a．調査区北側谷部完掘（南から）

b．調査区南側尾根筋完掘（南から）

はしがき

広島県のほぼ中央に位置する東広島市は、県央の中核都市としての存在感が高まる中、「選ばれる都市、東広島」、の実現に向けて、「仕事づくり」、「暮らしづくり」、「人づくり」「活力づくり」、「安心づくり」の５つの施策の実現に取り組んでいます。

中でも、都市としての持続的な成長を維持しつつ、地域の活性化、生活の質的向上が実感でき、「仕事も暮らしもナンバーワン」と評価されるまちづくりを目指し、公共交通ネットワークの利便性向上や、交流・連携を支える交通基盤の整備などの重点施策を推進しています。そうした施策の中で多くの人を呼び込み、集える場所づくりの一環として新たに西条町寺家地区で「道の駅」整備事業が計画されました。

今回、「道の駅」整備にあたり、発掘調査が実施された場所は寺家地区の中でも西側の山間部にあたります。調査地の南側には、国道２号線（西条バイパス）が通り、西条盆地と八本松地域をつなぐ山間の交通の要衝となっています。発掘調査では調査区内より古代から近世までの土器が出土しており、以前からこの地域が西条盆地から八本松方面へ抜ける山間の交通路として利用されていた可能性があります。

本報告書は、上記のとおり「道の駅」整備事業に伴って実施した発掘調査の成果を記録したものです。地域の歴史を解明する一助となり、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めていただくための資料となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施・報告書の刊行にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各機関、研究者の皆様、地元の方々に対し、深く感謝いたします。

平成 31 年 3 月

東広島市教育委員会

教育長　津　森　　毅

例　言

1 本書は、東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が発掘調査を実施した、道の駅整備事業に係る吹越（ふけこ）2号遺跡（東広島市西条町寺家）の発掘調査報告書である。

2 発掘調査並びに整理・報告書作成作業は、東広島市長（政策企画部政策推進課）からの依頼を受けて、平成 29・30（2017・2018）年度に市教委が実施した。

3 発掘調査は、市教委の主査植田広、埋蔵文化財調査員日浦裕子、盛菜つみが担当し、市教委職員が協力した。

4 整理・報告書作成作業は津田と日浦、盛が担当し、市教委職員が協力した。

5 遺構の実測・写真撮影は、植田・日浦・盛が行った。

6 遺物の実測は、盛が行った。写真撮影は津田が行った。

7 本書の内容は津田が執筆した。編集は津田が行った。

8 遺物実測図と写真図版の番号は同一である。

9 第 1 図は国土交通省国土地理院発行の 1：25,000 地形図『安芸西条』を使用した。第 2 図は東広島市発行の 1：2,500 東広島市地形図（N-6）を使用した。

10 本書で使用した方位は、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）である。

11 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。SD：溝状遺構、SX：性格不明遺構

12 調査で得られた資料については、すべて東広島市教育委員会が保管している。

調査体制

平成 29 ～ 30 年度

東広島市教育委員会

教育長：津森毅

生涯学習部長：下宮茂（～平成 30 年 3 月 31 日）、國廣政和（平成 30 年 4 月 1 日～）

生涯学習部次長兼文化課長：岡田誠有

参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

調査　調査係主査：植田広（～平成 30 年 3 月 31 日）

調査係主事：津田真琴（平成 30 年 4 月 1 日～）

埋蔵文化財調査員：日浦裕子、盛菜つみ

事務　調査係主査：松仁猛　　事務職員：片山由紀子

吹越２号遺跡発掘調査報告書

目次

Ⅰ　はじめに ……………………………………… 1

Ⅱ　位置と環境 ……………………………………… 2

Ⅲ　調査の概要 ……………………………………… 4

Ⅳ　遺構と遺物 ……………………………………… 6

Ⅴ　まとめ ……………………………………… 15

奥付・抄録

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図 (1:25,000) ……………………………… 4
第２図　吹越２号遺跡周辺地形図 (1:2,500) ……………………………… 5
第３図　吹越２号遺跡遺構配置図（1:400）……………………………… 6
第４図　SD1 実測図・土層断面図（1：80、1：40）……………………………… 9
第５図　SD2 実測図・土層断面図（1：80、1：40）……………………………… 10
第６図　SD3・4 実測図・土層断面図（1：80、1：40）……………………………… 11
第７図　SD5 実測図・土層断面図（1：40）……………………………… 12
第８図　SX1 実測図（1：80）……………………………… 13
第９図　遺物実測図（1：3）……………………………… 14

表目次

第１表 遺物観察表…… 13

巻頭図版目次

巻頭図版ａ　調査区北側谷部完掘（南から）
巻頭図版ｂ　調査区南側尾根筋完掘（南から）

図版目次

図版１ ａ．調査区南側調査前風景（北から）
ｂ．調査区南側溝状遺構群（SD1 ～ 5）完掘状況（北から）
図版２ ａ．溝状遺構（SD1）断面（南から）
ｂ．溝状遺構（SD2）断面（南から）
ｃ．溝状遺構（SD4）断面（南から）
ｄ．溝状遺構（SD5）北側不整形土坑断面（南から）
ｅ．性格不明遺構（SX1）遠景（南から）
ｆ．性格不明遺構（SX1）近景（南から）
図版３　遺物図版１
図版４　遺物図版２

Ⅰ　はじめに

吹越２号遺跡 (東広島市西条町寺家) は、道の駅整備事業に係わり発掘調査を実施したものである。

平成 24(2012) 年 4 月 13 日付けで、東広島市企画振興部企画課(以下、「企画課」という。) から文化財等の有無及び取扱いについて、東広島市教育委員会生涯学習部文化課 (以下、「文化課」という。) に協議があった。文化課は、同年 6 月 4 日付けで、分布調査を実施した結果、開発計画地の一部で遺跡の有無及び範囲を確認するための試掘調査が必要である旨を回答した。その後、企画課から平成 25(2013) 年 3 月 7 日付けで、文化課へ試掘調査の依頼があった。文化課は同年 7 月 17 日付けで、試掘調査を実施した結果、計画地の一部で、吹越 2 号遺跡 (約 10,000 ㎡) を確認した旨を企画課に回答した。その後、事業が企画課から政策企画部政策推進課（「以下、「政策推進課」という。」）へ引き継ぎとなり、この政策推進課から吹越 2 号遺跡 (遺跡範囲約 10,000 ㎡の一部約 3,500 ㎡) について、平成 29(2017) 年 8 月 4 日付けで道の駅整備に伴う敷地造成工事を行うため、文化課に埋蔵文化財発掘の通知があった。文化課は、同年 8 月 8 日付けで、吹越 2 号遺跡について埋蔵文化財の現状保存が困難なため、事前に発掘調査を実施する旨を政策推進課に回答した。政策推進課は、同年 8 月 17 日付けで、埋蔵文化財の発掘調査について文化課に依頼した。文化課は、同年 8 月 24 日付け東広教文第 356 号で、発掘調査を実施することを承諾する旨を回答した。

発掘調査 (現地作業・基礎整理) は、吹越 2 号遺跡を同年 9 月から平成 30(2018) 年 1 月までの期間で実施し、整理作業及び報告書作成作業は、平成 30(2018) 年 8 月から平成 31(2019) 年 3 月までに実施した。

本報告書は、以上のような経過を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当該地域の歴史の資料として、また埋蔵文化財に対する理解を深める資料として広く活用していただければ幸いである。

発掘調査にあたっては、東広島市政策企画部企画課（旧：企画振興部企画課）および政策企画部政策推進課の御協力を得るとともに、地元の方々には調査をはじめとして多大なる御協力をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

吹越２号遺跡は、東広島市西条町寺家字吹越に所在する遺跡である。所在地である東広島市は、広島県のほぼ中央に位置し、市域の西部を広島市と接する人口 19 万人の中核都市である。市域の大部分は西条盆地と呼ばれる標高 200 ～ 300mの低位丘陵及び平野が広がり、その周辺を標高約 400 ～ 600mの山々が囲んでいる。

本遺跡は西条盆地を囲む山々のうち西側、標高 300m強の独立した低丘陵から伸びる緩斜面上に所在している。この低丘陵は南北方向の開析谷によって東西に分けられており、このうち遺跡は西側丘陵の南東方向に伸びる尾根筋緩斜面、標高 250 ～ 260mの場所に位置する。以下では、本遺跡周辺の遺跡の様相について概観する。

【旧石器時代・縄文時代】

この時代の遺跡で調査され詳細がわかっているものの数は少ない。本遺跡周辺では、刈又池遺跡 (1) や七ッ池遺跡 (2) において縄文土器が採集されているほか、市内では広島大学構内の西ガガラ遺跡（鏡山）において後期旧石器時代のものと考えられるナイフ形石器などの石器類、住居跡や土坑が検出されている。

【弥生時代】

この時代の遺跡は多数確認されているが、前期の遺跡は少なく、中期後半以降のものが多くみられる。前期では、貞付谷遺跡 (3) では木葉文をもつ壺形土器が出土しており、土坑墓などが検出されている。中期では、集落跡として金平山遺跡 (4)、磯松池遺跡 (5)、徳政遺跡 (6) で住居跡などが確認されている。墳墓としては、弥生中期後半～中期終末期の木棺墓３基と土坑墓２基が検出された藤が迫墳墓群 (7) がある。本遺跡の近隣では団子山遺跡群のうち団子山５号遺跡 (8) から甕形、壺形、鉢形の土器が３点セットで深さ約 2mの竪穴土坑から出土している。終末期では、吹越遺跡 (9) から丸底に近い鉢形土器が出土した方形住居跡が検出されている。このほか弥生時代中期から後期にかけて金平山遺跡、貞付谷遺跡、寺家城遺跡 (10) で円形の竪穴住居跡が検出されている。

【古墳時代】

この地域では数多くの古墳が見つかっており、前期では竪穴式石室をもつ藤が迫古墳群 (11) の藤が迫第一号古墳がある。後期では横穴式石室をもつ向原古墳群 (12)、飯坂（かつえさか）古墳 (13) などが確認されている。また住居跡は徳政遺跡で中期後半頃の隅丸方形住居跡１軒と方形住居跡３軒を検出した。このほか金平山遺跡、貞付谷遺跡、寺家城遺跡からも古墳時代後期にかけての方形の竪穴住居跡が検出されている。

【古代】

律令時代、当地域は安芸国賀茂郡に属し、安芸国分寺（現史跡安芸国分寺跡）が建立された。本遺跡周辺では藤が迫古墳群の藤が迫第３号古墳から古代の役人の帯飾である石帯の巡方が出土しているほか、ＪＲ八本松駅後背から北東に伸びる丘陵裾部に平安時代の須恵器窯跡の旦原（たんがはら）遺跡 (14) が所在する。また金平山遺跡 (3) から７世紀代の須恵器が出

土した方形ないし隅丸方形の竪穴住居跡を検出しており、徳政遺跡からは奈良時代の布目瓦が出土している。このほか明確な遺構としては確認されていないが古代山陽道がおそらく第１図中のどこかを通っていたと可能性が高い。

【中世】

中世の遺跡としては、城仏土居屋敷跡[15]、土居遺跡[16]、寺家城跡などの城館跡が遺く確認されている。このほか集落跡としては妙福寺遺跡[17]があげられ、中世の掘立柱建物跡を検出した。また中世の山陽道も第１図中のどこかを通っていた可能性が高い。

【近世以降】

江戸時代になると近世山陽道[18]が遺跡の北側を東西方向に通り、江戸時代中期には広島藩が推進した新田開発により刈又池などの農業用水の溜池が築かれ、この地域の開発、整備が行われていたようである。

(1)『広島県遺跡地図Ⅱ（呉市・東広島市・安芸郡・賀茂郡）広島県教育委員会 1994

(2)（1）と同じ

(3)『金平山遺跡・貞付谷遺跡』財団法人広島県埋蔵文化財センター　1992

(4)（3）と同じ

(5)『磯松遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会　2008

(6)『徳政遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会　1982

(7)『広島県文化財調査報告第９集』広島県教育委員会　1971

(8)『団子山５号遺跡発掘調査報告書－寺家地区産業団地造成事業－』 2015

(9)『吹越遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団』 1997

(10)『寺家城遺跡・近信遺跡』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1993

(11)（7）に同じ

(12)（1）に同じ

(13)『広島県川上村史』川上村史発行会　1960

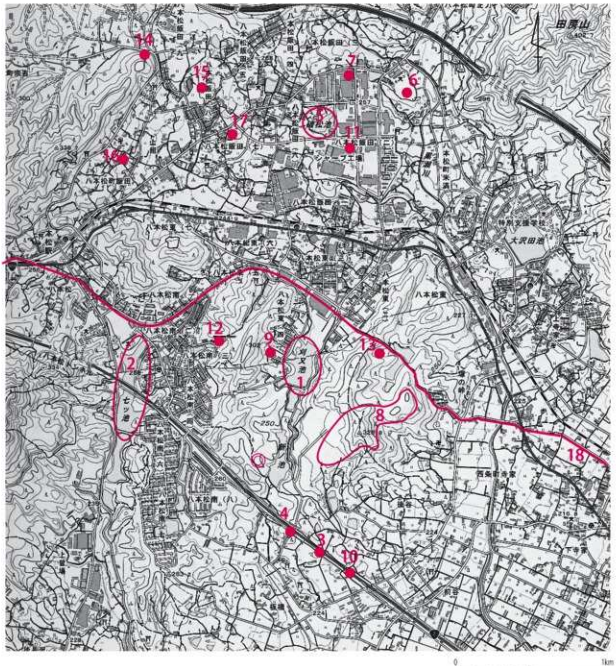
(14)『旦原窯跡発掘調査報告書』『埋蔵文化財報告書』東広島市教育委員会 1983

(15)『城仏土居屋遺跡』財団法人東広島市教育文化振興事業団 2001

(16)『土居遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 2001

(17)『妙福寺遺跡発掘調査報告書－八本松飯田宅地開発事業－』2017

(18)『広島県史』近世Ⅰ・Ⅱ』広島県 1981～1984



第１図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

◎：吹越２号遺跡

1．刈又池遺跡　2．七ツ池遺跡　3．貞付谷遺跡　4．金平山遺跡　5．磯松池遺跡　6．徳政遺跡
7．藤が迫墳墓群　8．団子山遺跡群　9．吹越遺跡　10．寺家城遺跡　11．藤が迫古墳群　12．向原古墳群
13．飯坂古墳　14．旦原窯跡 15．城仏土居屋敷跡　16．土居遺跡　17.妙福寺遺跡　18．近世山陽道（西国街道）

※詳細な位置は遺構として検出されていないため不明だが、図中のどこかに古代山陽道および中世山陽道が通っていた可能性が高い。

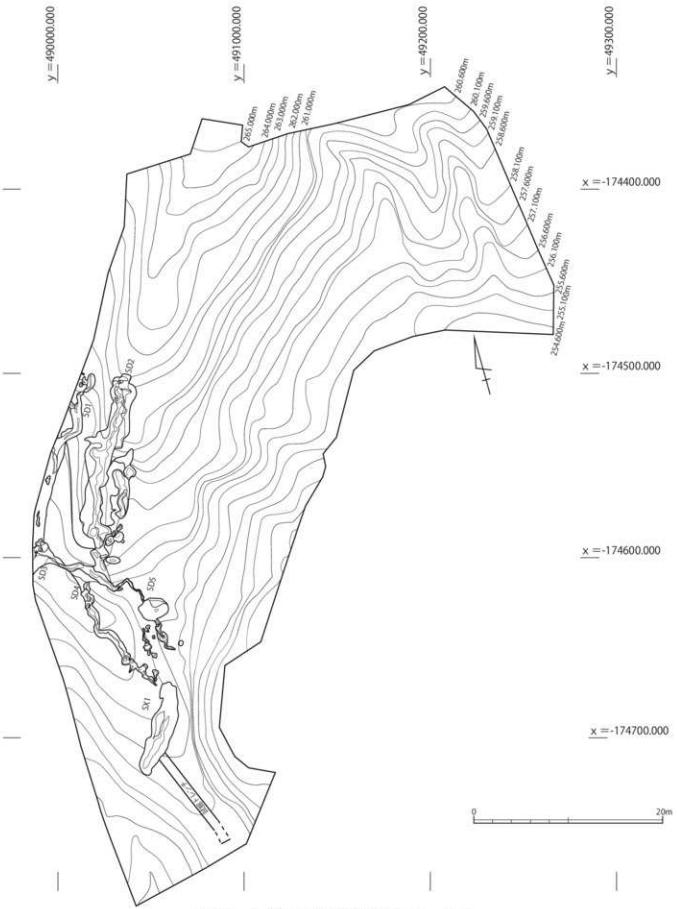
Ⅲ　調査の概要

吹越２号遺跡の発掘調査は、調査面積が約 3,500 ㎡である。試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削した。その後、人力での精査作業による遺構検出を実施し、検出した遺構は順次手作業による掘り下げ、断面・平面実測作業や平板による測量実測などを随時実施した後に、遺跡全体の完掘写真撮影を実施した。

調査の結果、表土直下から真砂土の地山面と遺物を含む溝状遺構などが検出された。遺構検出面の標高は約 260m～ 265mで尾根筋にあたる。遺構は不整形な溝状遺構５条、性格不明の不整形土坑１基を検出した。遺物が出土した不整形な溝状遺構は人工的な掘り方が検出されていないことから雨水等の流れ込みで形成されたものと考えられる。遺物は須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器などがコンテナ（540mm×340mm×100mm）３箱分、出土したが多くは図示しえないほどの小片である。

出土した遺物は、水洗と注記作業を実施し、接合と復元作業、実測、写真撮影などの記録を行った。整理作業及び報告書作成作業とあわせ、保管のための分類・収蔵作業も実施した。

第２図　調査区と周辺地形図 (1:2,500)



第3図　吹越2号遺跡遺構配置図（1：400）

Ⅳ　遺構と遺物

SD1（第４図、図版２）

SD1 は、調査区南側中央、西端谷筋に位置し、南北方向に延伸する不整形な溝状遺構である。規模は調査区内での検出部分で長さ約 9m、幅約 0.7 ～ 1.2m、深さ約 0.3 ～ 0.7m を測る。壁の立ち上がりは逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色砂質土（第 1、2 層）の堆積下に赤褐色粘質土（第 3 層）が入り込む形となっている。SD1 の埋土内から須恵器坏蓋の破片（1）、器種不明の須恵器小片が出土した。

SD2（第５図、図版２）

SD2 は SD1 から東側 3m離れた尾根筋に位置し、不整形な溝状遺構で、今回検出した中では最も規模が大きく比較的多くの遺物が出土した。規模は長さ約 21m、幅約 1 ～ 3m、深さ約0.4 ～ 1.8m を測る。断面は逆台形で底部の中央が盛り上がり両端が下がる形となる。埋土の堆積状況は、第 1 ～ 5 層は明黄褐色砂質土との混合土からなり、第 2 層には木炭が比較的多く含まれ、第 3 層では須恵器片などの土器が出土した。このほか橙色と明赤褐色のやや粘質土からなる層（第 6 層）からも須恵器片などが少量出土した。溝状遺構の底部にあたる第 8 ～ 12 層は主に黄褐色砂質土からなり、西端の落ち込み部分となる第 11 層には礫が多く含まれる。遺物は、須恵器甕の頸部片や胴部片、器種不明の須恵器小片が中心で、このほか土師質土器小片、流れ込みの陶磁器片も出土した。

SD3（第６図）

SD3 は、SD1・SD2 の南側に位置し、SD2 と SD4 の間を東西方向に抜ける不整形の溝状遺構である。規模は調査区内での検出部分で、長さ約 10m、調査区西端で幅約 2.5m と広がるがそれ以外の箇所では幅約 0.3 ～ 1.1m、深さ約 0.3 ～ 0.9m を測る。壁の立ち上がりはやや鋭角な逆「ハ」字形を呈する。遺物は出土していない。

SD4（第６図、図版２）

SD4 は、SD3 を挟んで SD2 の南側の尾根筋に位置し、北から南東方向に延伸する不整形な溝状遺構である。規模は、長さ約 12m、幅約 0.4 ～ 1.0m、深さ約 0.3 ～ 0.8m を測る。壁の立ち上がりはやや鋭角な逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、褐色粘質土と明褐色粘質土の混合土（第 1 層）からなる。遺物は、土師器高坏の脚部破片、須恵器甕の頸部片や胴部片、器種不明の須恵器小片が出土した。埋土は、明黄褐色砂質土 1 層のみである。

SD5（第 7 図、図版 2）

SD5 は、SD3 の東側に位置し、南東方向へ延伸する比較的狭小で不整形な溝状遺構である。規模は、長さ約 6m、幅約 0.2 ～ 0.4m、深さ約 0.1 ～ 0.3mを測る。壁の立ち上がりは鋭角な逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、黄褐色砂質土と明黄褐色砂質土の混合土からなる。また溝状遺構の北半は不整系形な土坑となっており、土坑の規模は長軸約 3.2m、短軸約 2.5m、深さ約 1.2mを測る。土坑の埋土堆積状況は、礫を多量に含む灰白色砂質土（第 1 層）、橙粘質土と明黄褐色粘質土の混合土（第 2 層、炭化物少量含む）、黄褐色砂質土と明黄褐色砂質土の混合土（第 3 層、炭化物少量含む）からなり、倒木痕と考えれる。遺物は土師器小片 1 点、須恵器甕胴部の破片が 2 点出土している。

SX1（第 8 図、図版 2）

SX1 は、SD4 流末のすぐ東側に位置し、北東から南西方向へ尾根筋を横断する平面形不整形で細長い土坑状の性格不明遺構である。規模は、長さ約 10m、幅約 1.2 ～ 2.8m、深さ約 1.5m～ 1.8mを測る。壁の立ち上がりは北側で崖状となる。また土坑の南西端は、崖地となって谷部へ落ち込み、北東端は風化により脆くなった層が谷部へ潜りこむかたちとなっている。遺物は出土しておらず埋土も一様な砂質土であったことから地質的に風化が進んだ土壌が侵食され脆く変質したために形成された自然地形と考えられる。

出土遺物（第 9 図、図版 3・4）

1 は、SD1 から出土した須恵器坏蓋で坏身に対するかえりが口縁部内面に付くタイプである。中央が欠損しているためつまみがあったかどうかは不明であるが蓋側に小さいかえりがつくタイプであることから 7 世紀中頃～ 8 世紀のものと考えられる。

2 は、SD2 から出土した須恵器甕頸部の破片である。頸部から口縁部にかけて外傾するが口縁部は欠損している。頸部内外面はナデ調整され、胴部に向けて同心円文の当て具痕がみられる。

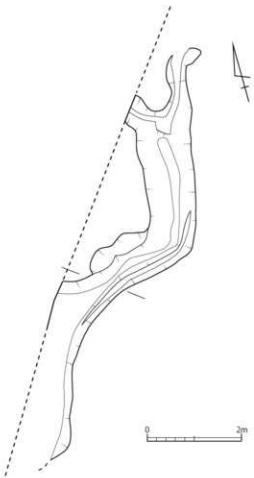
3 は、SD3 から出土した須恵器甕胴部の破片である。外面は摩耗が著しく調整不明だが内面には粗い同心円文の当て具痕がみられる。

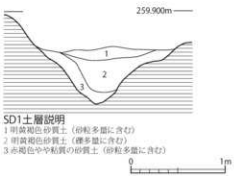
4 は、SD2 から出土した土師質土器小片である。小片のため器種は不明だが皿などの一部と考えられる。同じ SD2 から出土した須恵器類より後世のものと考えられるが時期等詳細は不明である。

5 は、SD4 から出土した土師器高坏である。焼成良好でわずかにシボリ痕が残るが器壁の内面まで平滑にケズリ調整されている。

6 は、SD4 から出土した須恵器甕頸部の破片である。小片のため製作時期等詳細については不明である。

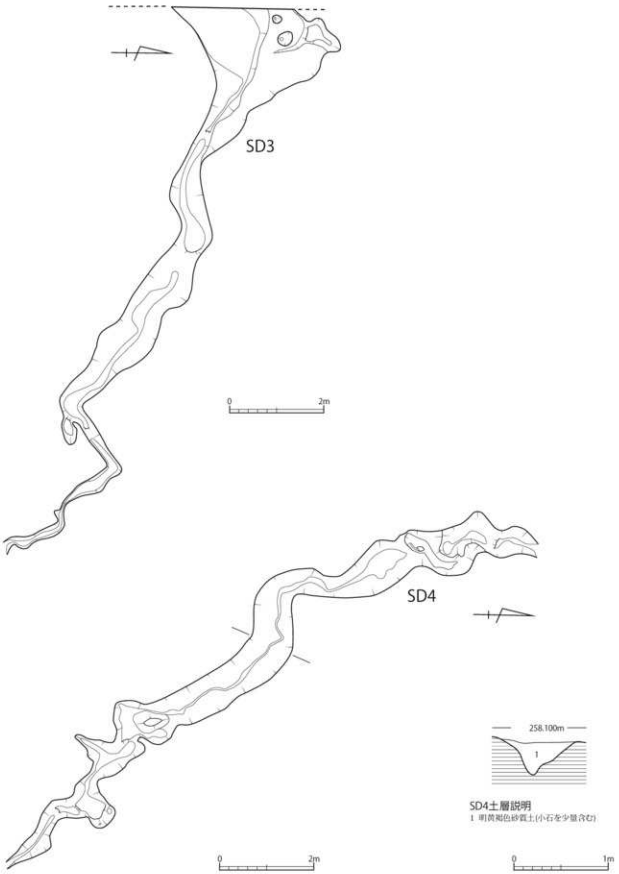
7 は、SD4 から出土した須恵器甕胴部の破片である。頸部から口縁部にかけて外傾するが口縁部は欠損している。頸部内外面はナデ調整され、器壁内面に同心円文の当て具痕がみられる。



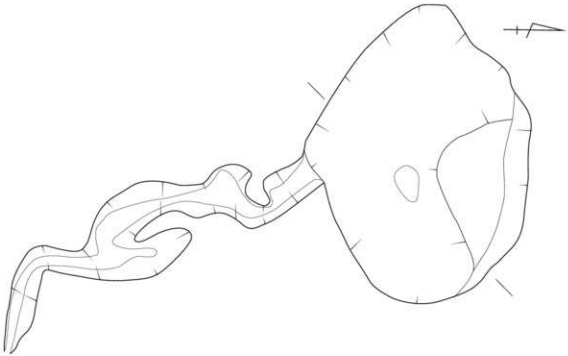


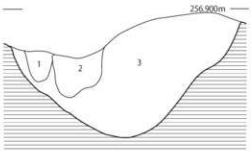
第４図　SD1 実測図（1：80、1：40）

第５図　SD2 実測図（1：80、1：40）



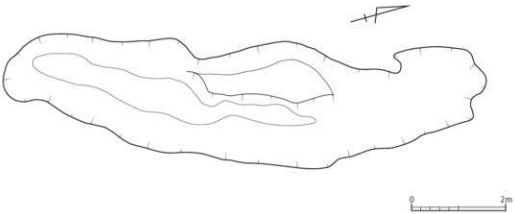
第６図　SD3・4 実測図（1：80、1：40）





SD5土層説明
1　灰白砂質土(礫を多く含む)
2　粗粘質土と明黄褐色やや粘質土の混合土（炭化物少量含む）
3　黄褐色砂質土と明黄褐色砂質土（10YR 6/8と2.5YR 5/8）の混合土（炭化物少量含む）

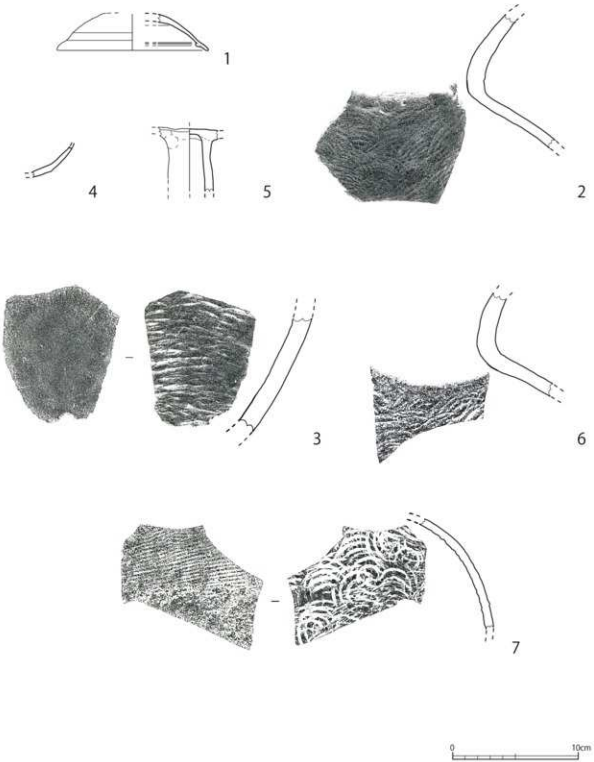
第７図　SD5 実測図（1：40）



第８図　SX1 実測図（1：80）

表１　吹越２号遺跡　遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) (　)は復元値	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	SD1	須恵器	坏蓋	口径：（12.0） 器高：—	密	良	外面：灰黄 内面：灰白 断面：灰	外面：ナデ 内面：ナデ	内面かえり有。中央部欠損のためつまみの有無は不明。 断面一部焼き締まり箇所あり
2	SD2	須恵器	甕	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：灰白 内面：灰	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 同心円文	頸部破片 口頸部に沈線
3	SD2	須恵器	甕	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：灰白 内面：灰	外面：ナデ 内面：平行タタキ	胴部破片
4	SD2	土師器	皿か？	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄橙 内面：明黄褐 断面：橙	外面：ナデ 内面：ナデ	断面一部焼き締まり箇所あり
5	SD4	土師器	高坏	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄橙 内面：黄橙 断面：黄橙	外面：ユビナデ 内面：ケズリ	脚部中空で脚部内面を平滑にケズリ調整
6	SD4	須恵器	甕	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：灰 内面：青灰	外面：ナデ 内面：回転ナデ 同心円文	頸部破片
7	SD4	須恵器	甕	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：灰白 内面：灰白	外面：平行タタキ 内面：同心円文	肩部破片



第９図　出土遺物実測図（1：3）

Ⅳ まとめ

吹越 2 号遺跡は道の駅整備事業に係わり発掘調査を実施したものである。遺構としては平面不整形な溝状遺構 5 条（SD1 ～ 5）と、不整形で細長い土坑状の性格不明遺構（SX1）が検出された。このうち SX1 については自然地形の一部が地質の違いなどから侵食されたものと考えられる。

遺物では SD1 から出土したかえりのつく須恵器坏蓋からある程度時期を推測でき、7 世紀中頃から 8 世紀前半のものと考えられる [1]。このことから調査区内から出土したほかの須恵器類（甕など）も同時期のものである可能性が高い。また SD4 から出土した土師器高坏については脚柱内部が平滑に調整されており、良好な胎土で細身、垂直に近い立ち上りである。周辺の遺跡に類例がなく安芸国分寺周辺遺跡で出土した高坏などとも脚部の太さが異なる。近いものとしては難波宮址から出土する長脚の土師器高坏のうち脚部内中空で内面ケズリ調整により絞り痕を消し平滑化したものに類似する [2]。こちらについても須恵器と同時期、7 世紀中頃の高坏と考えられる。

検出した遺構のうち溝状遺構は SD1・3 が谷筋、SD2・4 が尾根筋に位置し、遺物は尾根筋側に位置する SD2 および SD 4 から比較的多く出土した。SD1 ～ 5 は不整形な溝であることから大雨などに伴う流水で削られた結果、形成されたものと考えられる。ただしこれらの溝状遺構のうち、SD2 および SD4 については尾根筋に位置するため自然に流水が入り込んだだけで幅のある溝状に削れるとは考え難い。原因としては尾根筋部分が通り道などとして人工的に開削されていたため周辺に比べて植生がなく雨水等による浸食を受けやすかったことなどが考えられる。時期としては SD1 で出土した須恵器坏蓋片や比較的多く出土した須恵器甕の破片から 7 世紀中頃から 8 世紀前半が中心となると考えられる。廃絶時期については不明だが、調査区西側に隣接して現在の山道が通っていたことから、仮に道跡であったとすると流水などで維持が難しくなった結果、整備を諦め現存した側の山道を作り直したものと考えられる。この山道は近世には年貢米を運ぶための山間の道として機能していたという地元住民の話があり、少なくとも近世の後半までには尾根筋の道を廃絶して現在の山道へとルートが変更されたと考えられる。実際に調査区内から出土した近世以降の遺物は量も少なく、その多くが表採品である。

なお、本調査区の地形が大雨に伴う流水で崩れ易かったと考えられる痕跡はＳＤ5 北側で検出された倒木痕からもうかがうことができる。SD5 そのものは谷筋の小さな溝状遺構であるが、その北側には長軸で 3m以上を測る大型の不整形土坑が検出されており、大雨に伴う流水などで木が根こそぎ倒された痕跡と考えられる。調査区内には同様の不整形な土坑状の痕跡が数多く検出され、特に斜面地となっている調査区北東側では高い密度で倒木痕と考えられる痕跡が見つかっている [3]。

また山道とする以外の目的で尾根筋が開削されていた可能性もあるが、今回の調査区域や周辺の試掘結果においても集落跡と考えられるような柱穴や竪穴などの住居関連の遺構は検出されていない。

以上のことから今回、発掘調査した調査区内で検出した主に須恵器を包含する不整形な溝状遺構については、7 世紀中頃から 8 世紀前半を中心とした時期、尾根筋に整備された山道が、その後、大雨に伴う流水等で削られ、尾根筋に沿った不整形な溝状遺構として残ったものと考えられる。また周辺の倒木痕の多さからも幅広の道は維持が困難だったであろうことがうかがえ、須恵器以外の遺物がごく少量の細片のみであったことから、古代の山道はかなり短期間で廃絶してより小規模な道へと切り替えられた可能性が高い。切り替え時期の詳細は不明であるが、刈又池、新池など新田開発用の溜池が築かれた近世後半以降の出土遺物などは、多くが表採であり、江戸時代には調査区のすぐ西側に現存した小さい山道へとそのルートが切り替えられたと考えられる。なお、山道と仮定しているが、実際の地形としてはあくまで尾根筋にそって流水等で削られた不整形の溝に須恵器や同時期の土師器が包含されているだけであり推測の域を出ない。仮に山道として整備したとすると、古代山陽道整備時期にあたり、当時の周辺道路網整備の一環として幅広の道を整備しようと尾根筋を開削したところ、逆に雨水の通り道となってしまい流失を招いたとも捉えられる。いずれにせよ現状では明確に人為的な遺構と判断できる状態では残存しておらず詳細については今後の周辺の調査事例の増加に期待したい。

＜参考文献＞

(1)　中村　浩　『和泉陶邑窯出土須恵器の編年』芙蓉出版社　2001

(2)　京嶋　覚　「「難波型」土師器の系譜とその意義－古墳時代後期土師器の地域性と海上交通」『大阪文化財研究所　研究紀要　第 16 号』公共財団法人　大阪市博物館　大阪文化財研究所　2015

(3)　白神典之・永井正浩・鹿島吉則「東浅香山遺跡発掘調査報告Ⅴ・調査のまとめ」『堺市文化財調査概要報告　第 88 冊』 堺市立埋蔵文化財センター　2000　なお、参考とした報告書内では風が原因の「風倒木痕」と記載されているが、今回の倒木痕跡については風以外の大雨に伴う地すべり、流水などが原因である可能性が高いため「倒木痕」と表現した。

図　版

a．調査区南側調査前風景（北から）

b．調査区南側溝状遺構群（SD1～5）完掘状況（北から）

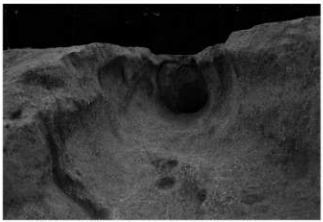
図版　2

a．溝状遺構（SD1）断面（南から）

b．溝状遺構（SD2）断面（南から）

c．溝状遺構（SD4）断面（南から）

d．溝状遺構（SD5）北側不整形土坑断面（南から）



e．性格不明遺構（SX1）遠景（南から）

f．性格不明遺構（SX1）近景（南から）

1

4

2

5

図版　4

—

—

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふきこしにごういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	吹越２号遺跡発掘調査報告書
副書名	―道の駅整備事業―
巻次	
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書
シリーズ番号	第62集
編著者名	津田真琴・日浦裕子・盛菜つみ
編集機関	東広島市教育委員会（東広島市出土文化財管理センター）
所在地	〒739-2201　広島県東広島市河内町中河内651番7号　TEL 082-420-7890
発行機関	東広島市教育委員会
所在地	〒739-8601　広島県東広島市西条栄町8番29号
発行年月日	西暦2019年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふきこしにごういせき 吹越2号遺跡	ひがしひろしまし さいじょうちょうじけ 東広島市 西条町寺家	34212	996	34° 26′ 01″	132° 42′ 12″	20170901 ～ 20180131	3, 500	道の駅造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹越２号遺跡	包蔵地	古墳 古代 中世 近世 近代	溝状遺構 性格不明遺構 不整形土坑(倒木痕)	土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 瓦類	流水等で削られて形成された不整形な溝状遺構に伴う遺物包蔵地。

要約　吹越２号遺跡は、標高は約260m～265mの尾根筋に位置し、調査区の西側には山間を抜ける小里道が通っている。調査区内からは溝状遺構、性格不明遺構、不整形土坑（倒木痕）などを検出、遺物は須恵器が中心で、このほか土師器小片、土師質土器小片、陶磁器が出土した。

東広島市教育委員会文化財調査報告書　第62集

吹越2号遺跡発掘調査報告書

発行日　2019（平成31）年3月29日

編　集　東広島市教育委員会（東広島出土文化財管理センター）
〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内651番地7

発　行　東広島市教育委員会
〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号

印　刷　有限会社アラ・アド
〒739-0022 東広島市西条町上三永1675番地